

藤島宗順『安永六年稽古百首詠藻案』解題と翻刻

藤	大	加	山	大
原	山	藤	中	谷
静	和	弓	延	俊
香	哉	枝	之	太

〔解題〕

一

京都女子大学蘆庵文庫には、新日吉社宮司であった藤島宗順（宝暦六年一七五六〜文政四年一八二二、六十六歳）の手になる安永六年（一七七七）の自筆和歌詠草が五種伝わる。「藤島宗順『詠草留』（安永六年分）解題と翻刻」（『国文論藻』（京都女子大学大学院文学研究科研究紀要）二二二号、二〇二三年三月、所収。以下「前稿」と称す）に拠

りその五種を示せば以下の通り。

- ①〔藤島宗順詠草〕(四―四三) 写本。横本、折紙列帖装、仮綴、一冊。共紙表紙。
- ②〔藤島宗順詠草〕(四―四八) 写本。半紙本、袋綴、仮綴、一冊。共紙表紙。
- ③〔藤島宗順詠草〕(四―八〇) 写本。半紙本、袋綴、仮綴、一冊。共紙表紙。
- ④〔藤島宗順詠草〕(四―四一) 写本。半紙本、袋綴、仮綴、一冊。共紙表紙。
- ⑤〔藤島宗順詠草〕(四―三四) 写本。横本、折紙列帖装、仮綴、一冊。共紙表紙。

前稿に於いて①を取り上げ論じたのを承けて、本稿では⑤について解題を記し翻刻を付し、神官にして非蔵人であつた藤島宗順の和歌初学期の修練の実態を明らかにする。

左に前稿にも記したが、⑤の委しい書誌事項を掲げる。なお、①④の書誌詳細は前稿を参照されたい。

〔藤島宗順詠草〕(四―三四) 写本。横本、折紙列帖装、仮綴、一冊。共紙表紙。外題「安永六年九月(從廿三日)至十月十二日」百首詠藻案」(左肩・打付書・墨書)。内題、なし。表紙右下に「藤原宗順」の署名あり。寸法、縦一六・六糎、横二二・四糎。丁数、墨付二六丁。遊紙なし。半丁に二題、各二〜五首を記す。推敲あり。いずれも宗順筆。同年九月二十二日に卒した叔父の藤島信岑の服喪期間に詠じた稽古百首の詠草案。最終丁は、羽倉信美・橋本経亮から宗順に送られた服喪見舞の和歌を載せる。料紙、楮紙。紙背には宗順詠草が十枚、書状四通が見られる。

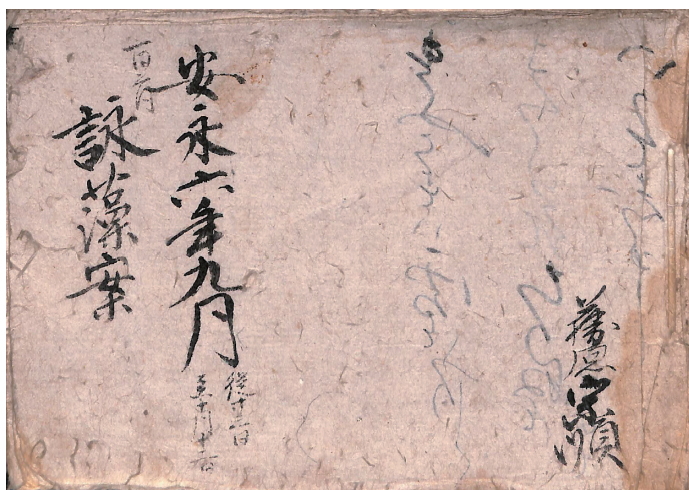
藤島宗順は明和三年（一七六六）十一歳にして出仕、非蔵人に補せられ、安永六年は二十二歳、この年、二月十七日に小沢蘆庵に入門した。

本稿で取り上げる⑤（四―三四）は、その表紙の打付書の外題に「安永六年九月（徒廿三日／至十月十二日）百首詠藻案」とあるように（図版A）、安永六年の九月二十三日から十月十二日にかけての二十日間に宗順が詠じた百首和歌の草稿である。仮綴の横本で半丁に二題ずつ計百題、各題に二首から五首の和歌が記される。書き入れ・書き止しの和歌もあり、推敲の跡も見られるが、すべて宗順自筆である（図版E参照）。合点・添削・評語は見られない。④（四―四一）宗順詠草には本書⑤と重なる和歌が五十七首収められているが、その冒頭「初冬」題の和歌（後の⑤の「翻刻」では259・258番歌に当たる）の題の右肩に「稽古百首」の文字が見える。蘆庵に入門後約七ヶ月の宗順は本百首を稽古のための百首と認識していた。この九月二十三日から十月十二日にかけての二十日間とはどのような期間なのか。宗順の詠草案を見る限りではそれ以上の記述は見出せないが、巻末の一丁には羽倉信美・橋本経亮から宗順への弔問の贈歌四首が記し留められている。その詞書に、

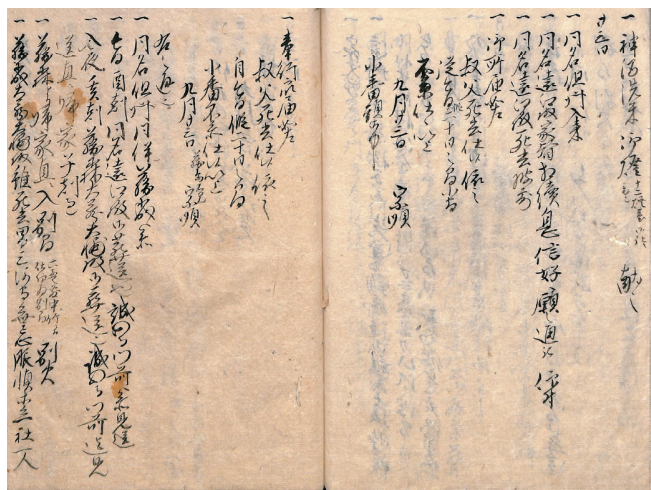
叔父なる人身まかり給ひしいみの中に送り給ふ

260 いく度か袖ぬらすらん村しぐれさだめなきよとおもひなしても 信美

とあり、宗順が叔父の喪中であつたことが示されている。そこで、蘆庵文庫所蔵の宗順自筆『藤島宗順日記 安永六丁酉年』（大二一六）（図版B）を閲すると、九月十九日条に



図版A 詠藻案 表紙



図版B 宗順日記 安永六年九月二十三日条

一、途中ニ而富田耆州公御面会。同名遠州公御所旁不相勝由御嘆。此間より不存、今日初而承。帰宅、差急故、御見舞、得不參。

とあり、藤島宗順は同名即ち藤島遠江の重病を知る。翌々二十一日には、

一、申刻前、同名藤藏人殿より使来。同名遠州公御病氣、御殊外及大切、家督相統願差出。仍為知旨、且今日者不及上京、明日に而も可參旨被示。(中略)

一、遠州公方へ參、様子承。先達而頭痛強御難義、其後時疫之処、少々御快。併全体氣鬱ニ而甚衰氣力、此比者瀉有之由。今日午下刻卒去之由、從此間日々出勤、彼是取紛、御病中見舞不參、扱々残念。

と病状悪化し、午下刻には卒去に至る。一日置いて廿三日には、死亡届が提出され、葬儀が執り行われた。

一、同名遠江殿家督相統、息信好へ願之通被 仰付。

一、同名遠江殿死去披露。

一、御所届如左。

叔父死去仕候。依之

従今日^取。二十日之間小番

不參仕候。以上。

九月廿三日 宗順

小番頭御中 (中略)

一、今日酉刻、同名遠江殿御葬送也。誠心寺門前へ参見送。

右の「御所届」にあるように、叔父藤島遠江の死亡による服喪期間は二十日間であり、九月二十三日から十月十

二日はそれに当たる。この間、宗順は「別間別火」（『藤島宗順日記』九月二十二日条）で過ごし、十月十二日に至り、一、今日服限也。依之茶屋火用之。

と服限を終えた。つまり、出仕を留めていた時間を利用して和歌の稽古のため百首の和歌を詠むことを自らに課したことになる。二十日間で百首を詠むには、平均すれば一日に五題、各題二首乃至三首として計十数首ずつを詠むという習練を行ったのである。

三

さて、⑤本書は「百首」とあり実際に百題が揃っているのであるが、その排列は四季・恋・雑の通常の百首歌とは異なる。巻初から示せば、立春（春）・更衣（夏）・寄虫恋（恋）・曉霧（秋）・寄舟恋（恋）などとあって、特に排列に規則性は見出せない。しかし、宗順は当初から百首歌を詠むつもりであったと思われる。その傍証として、以下の二点を挙げる。

一つは、⑤の百首題が、慶安三年刊『明題部類抄』巻四、六丁裏から八丁表に所載の「年記可勘注之」の百首と九十四題が一致するからである。題の異同は以下の通り（「年記可勘注之」の百首↓⑤の百首題）。

里梅↓眺望、故郷橋↓簷橋、閑中雪↓神楽、寄玉恋↓寄舟恋、寄鏡恋↓寄灯恋、故郷↓夕虫

春の題が一首減り、秋の題が一首増える結果になっているが、一致率からして既存の百首題を利用していることは動かないであろう。

二つ目は、⑤の紙背文書の十二枚目は、⑤の歌と重なる歌が記された一紙であるからである（図版D）。⑤の表

の面では、二十丁表から二十三丁裏部分の紙背に当たる一紙である（図版C）。そこには、題と和歌とが書かれているものと、題のみで和歌が書かれていないものがある。題と和歌の両方が揃っているものは、⑤表面でいえば二十二丁より前の部分に記載されている。題のみが書かれている題の歌は、⑤表面では二十二丁表より以後に記載されている。従って、⑤表の面に書かれた歌がある時点で紙背の一紙の形に転記しまとめられることがあり、その後、さらに表面の歌が詠まれて行つたと思われる。紙背の一紙は百首歌の通常の排列順になつてゐるので、ならばらの順番で詠まれていたものを、ある段階で通常の排列に整えてみたものであろう。先の、題のみで歌のないものはその時点ではまだ詠まれていない題であることと⑤表の面での配列とが齟齬しないところから、実際に⑤表面の順番に歌が詠まれていったであろうことが想定される。飛鳥井雅章述『尊師聞書』（384）に、

百首の歌をよむには一首づゝ初より次第くゝによみたるはあしゝ。さきへとばして、よみにくき題を跡に何首もよむべし。難題に心をなやます時は、先にて歌あしく出来るもの也。よみかたのならひ也。（『近世歌学集成』

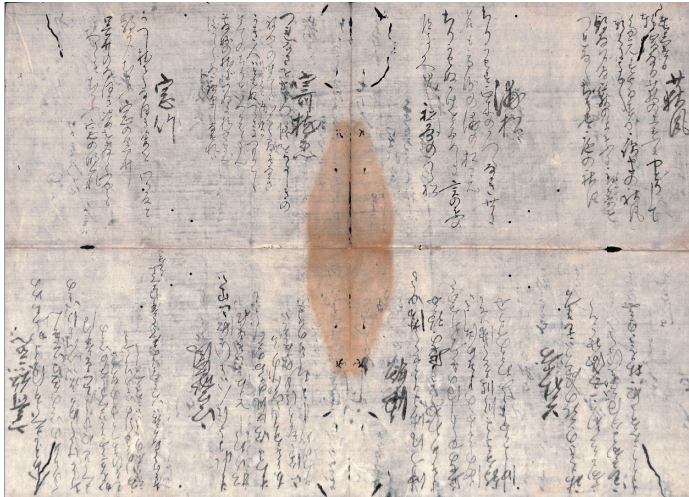
上）

とあるように、百首和歌は必ずしも排列通りの順番で詠まれて行くものとは限らない。⑤も当初から定まった題の百首歌として、かつ順番は任意に詠まれていったと思われる。

四

次に、⑤と①ゝ④の他の宗順詠草との関係について述べる。

本書⑤所収の和歌二百六十三首のうち、①とは四十一首、④とは五十八首が重なる（本書との重なりについては、



図版C ⑤紙背1



図版D ⑤紙背2

以下の翻刻の各和歌の末尾に①・④の記号を付して示した。また、上述のように、⑤の紙背には、⑤の表面の詠草と重なる和歌が見られた（同じく該当和歌の末尾に⑤と付した）。⑤の詠草には、紙背の⑤を含めて、合点・添削が施されていない。即ち⑤は外題に「詠藻案」とある通り、宗順自身による草稿であり、蘆庵に添削を受ける前の書留であると考えられる。

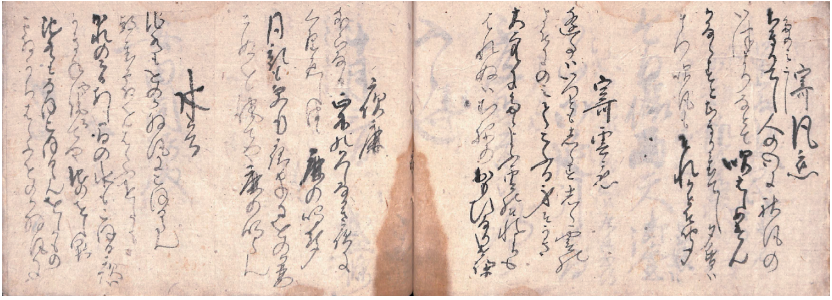
①との関係を確認すれば、例えば、本書⑤の「寄風恋」題の138番歌・139番歌（図版E）は、それぞれ①の254番歌・253番歌（図版F）にも記載されているが、①の253番歌には合点が施されており、①254番歌には

254 たのみこし人の心に秋風のいつよりなどて吹はじめけん

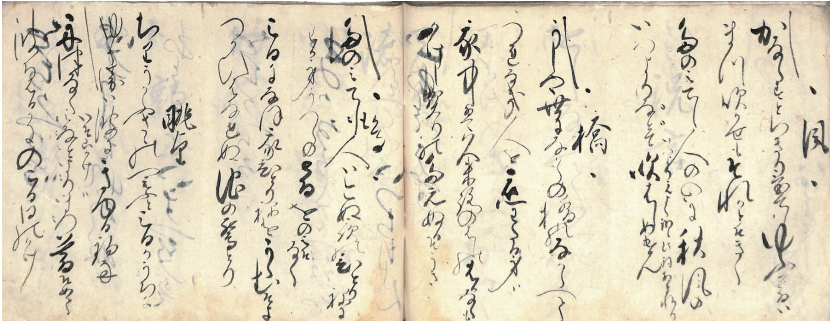
《いつよりにて、よく調候。此詞あまれり》

と、評語が付されている。①は、⑤の詠草を後に蘆庵に見せて合点・添削を受けた後の形を載せている。

また、⑤と④との関係は、以下の翻刻に於いて重なる歌の次の行に④との異同を（ ）内に記したので、それによつて、⑤が詠草の草稿段階のもの、④は後日清書された詠草で合点・添削・評語が加えられている。従つて、④も⑤の詠草を後に蘆庵の合点・添削指導を仰いだものである。なお、④は第一丁表右上に「安永六年」と、十八丁表右上に「安永七年」と小字朱筆で記すので、十七丁裏までは安永六年、それ以降は安永七年の詠草であると考えられる。安永六年分は三十四題、六十八首あり、そのうち二十九題、五十八首が⑤と重なるが、題はいずれも冬から恋・雑の題で排列も本来の百首歌の順番である。百首歌の冬・恋・雑の題は合わせて四十五題になるので、およそ三分の二が④に載せられていることになる。とすれば、春・秋の題の歌を載せた、④と同じような冊子の存在を想定すれば、⑤の百首全体に渡つて蘆庵の合点・添削・評語を受けたことにならう。⑤の四十五題のうち二十九題分が④に記載されるのは、宗順自身が選んで蘆庵に見せたとも考えられなくはないが、おそらく百首全体を蘆



図版E ⑤寄風恋



図版F ①寄風恋

庵に見せ、合点・添削・評語を受けたものを、後に抜き出してまとめたものであるからと考えるのが妥当であろう。前稿解題では④の書き入れ部分を宗順とは別筆で小沢蘆庵の筆跡の可能性にも言及したが、やはり宗順が蘆庵の添削を転記したものである可能性は低くないと考える。書入の筆者については第三者の可能性も含めて、引き続き慎重に考える必要がある。

五

前述したように、⑤は安永六年九月二十一日に没した宗順叔父の服喪期間に詠じられた百首であった。その死去に関しては、先掲の『藤島宗順日記』に加え、宗順父の藤島宗韶自筆『藤島宗韶日記』（蘆庵文庫所蔵、外題「安永六丁酉年九月十九日より至十月十二日／日記／藤原宗韶」、大三一一〇）も服喪期間分を別冊として一書にまとめられている。これらにより死去から葬儀に至る顛末、親類関係などを知ることができる。その次第を略記すれば以下の通り。

九月 十九日 藤島遠江（信岑）の病状が悪化。

二十一日 巳刻ごろより急変。子の摂津信好への家督相続願の相談。午下刻に卒去。

二十二日 遠江室の剃髪願が認められる（翌日、号は峯心院と決まる）。「今晚内々入棺」。

二十三日 信好への家督相続願が認められる。遠江の死去届提出。

遠江の兄弟・甥・子がそれぞれ御所へ服喪届を提出。

西刻、遠江葬送。於伏見誠心寺。

（なお、同日亥刻より同所に於いて藤森前神主大藏大輔の葬儀も行われた）

二十四日 遠江の子の摂津信好より院号「順高院随嚴教竹居士」が届く。

実際に死去したのは二十一日だが、死亡届が出されたのは相続願が認められてからの二十三日であり、同時に親類によって以下の服喪届が提出されている。

(1)弟信岑致死去候。依之、從今日廿日之暇九十日着服候。尤不混穢候。仍為御届如是御座候。以上。

九月廿三日 助具

(2)弟信岑致死去候。依之、從今日廿日之間小番不參仕候。以上。

宗韶

上北面御中

院藏人御中

(3)兄

広章

小番所御中

右仙洞御所并奉行月番広橋殿衆へ為持遣。

(4)叔父信

助功

小番所御中

(5)同断

宗順

さて、宗韶は、二十六日には順高院（信岑）石塔の事を隠岐（広章）と相談し決定（図版G参照）、石工へ申し付けなどとして、「一、跡の義、万端申談」と記し、今回の弟信岑死去一件に一段落付けた。翌二十七日の記事は、

一、壹岐入来、入夜壹岐同道、隠岐方へ参、追善和哥当座相催。

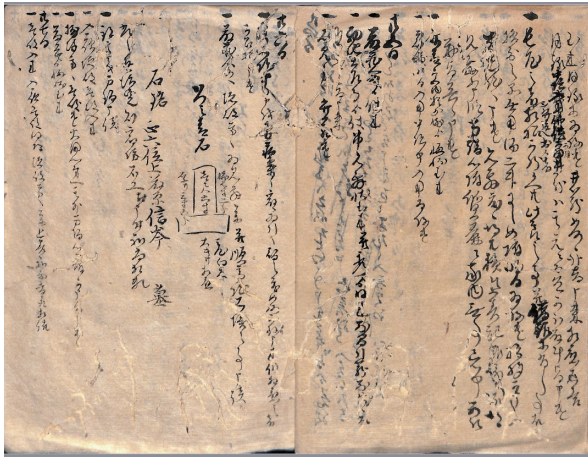
とあるのみ。宗韶は壹岐（富田延成）と共に隠岐（広章）邸に赴き追善和歌当座会を催した。葬儀から四日後、漸くにして一日の暇を得た宗韶ら三人は、閑に和歌を詠むことで故人を偲んだのであろう。

また、上述のように、⑤の最終丁には、羽倉信美・橋本経亮から宗順に送られた服喪見舞の和歌が載せられている。『藤島宗順日記』の九月二十一日条に

一、明後廿三日於当亭月次集會可相催處、右様子故延引之義、羽倉豊州方へ令相談。

とあり、二十三日に宗順宅で「月次集會」を開催するところであったが、叔父信岑が危篤であることから延期することを羽倉信美へ相談している。ここでの「月次集會」の内実は不詳であるが、『非藏人盟約』（蘆庵文庫所蔵、七―十三）に「官暇にハ、学文手跡風雅之道相嗜、上古の風を学、心之内外に可弁事專要云々」とあるように、非藏人たちは日頃から非番の時に自主的に集會を催して自己修養に努めていたと言えよう（『非藏人盟約』と『歎歌道之興廢俳諧長歌二首』解題と翻刻―非藏人の誠めと戯れ―）京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』三五号、二〇二二年二月、所収、参照）。約一ヶ月後の十月二十三日の条に、

一、月次集會於当亭相催。



図版 G 宗詔日記 安永六年九月二十六日条

翌二十四日の条に、

一、月次和譚当座会、経亮丈亭被催、参席。

とあり、延期していた九月の「月次集会」を十月二十三日に宗順が開催し、その翌日に十月の月次和歌当座会が橋本経亮宅で開催され、宗順が参加していることが分かる。藤島宗順・羽倉信美・橋本経亮は同年代の非藏人であり、ともに蘆庵門人であった。非藏人たちの自己修養のうちの重要な部分を和歌が担い、それが日常に定着しているさまが、追善当座歌会や服喪見舞の和歌から見て取れよう。

〔翻刻凡例〕

- 一、翻字は原則として原本通りとする。但、以下の項目については改めたところがある。
- 一、旧字体・異体字・合字は原則として通行の字体に改めた。
- 一、和歌は主として二行書きだが、一行書きに改めた。
- 一、適宜、句読点・並列点を施し清濁を分かった。
- 一、丁の表・裏の移り目は「」で示した。

一、割書部分は〈 〉で括り示し、改行箇所は「 / 」で示した。

一、見せ消ち部分は網掛けで示した。また、墨減・重ね書き部分は抹消線で示した。

一、虫損・抹消等による判読不能箇所は、字数が判る場合は□で、判らない場合は「」で示した。

一、単純な誤字訂正と認められる箇所は、改めた後の形で翻字した場合がある。

一、④との異同は該当する和歌の左に「」で示した。

一、評の書入は《 》で括り示し、該当語句に傍線を付した。

一、その他、私の注記事項は（ ）で示した。

一、訂正の前後で清濁が異なる場合は、清音表記のままとした。（例・90夕ぐれは千々のおもひの数そひて秋の哀

ぞげにたぐひなき）

一、上記①～④、⑤「」はその紙背文書に記されることを表わす）の宗順詠草資料に所載の和歌については、和歌の末尾に「④」などと注記した。①の場合は前稿の歌番号を付し「①246」などと記した。

〔翻刻〕

藤島宗順詠草 四―三四

外題「安永六年九月（從廿三日／至十月十二日）／百首詠藻案」（左肩・打付書）。

表紙右下に「藤原宗順」。

立春

1 はるきぬと四方にしらせて山端をいづる朝日の影ぞのどけき
2 けふといへばひなも都もおしなべて宿てふ宿にはるは来にけり

更衣

3 かへてしも香をだにうつせ夏衣きのふのはるの花の袂は
4 花染の心はかへじ衣手はきのふの春の名残なく共」1才

寄虫恋

5 とはるべきちぎりはたえし夕間暮何まつ虫の音にたてゝ鳴④
〔合点有り〕

6 かけてしも人はとひこぬ夕べ哉しはかなき蜘蛛の糸すぢ④

暁霧

7 あかつきの八声の鳥はなきてしもきりに夜ふかき山の下庵①246
8 鳥がねの声より後もほのくらくまだ夜をのこす秋ぎりの空①245」1ウ

寄舟恋

9 うしや身は蟹の捨舟末終によるべなぎさに朽やはてなん④
〔三句「末終」に、四句「よるべなぎさに」、末尾に「句切同字あたり候」と書入〕

10 身は終に朽やはてなん波の上のあまの捨舟よるべなければ④
〔初句「身はつゝあに」に、三句添削あるが破損のため判読不可、四句「あまのすて舟」
〔初句「身はつゝあに」に、三句添削あるが破損のため判読不可、四句「あまのすて舟」

簷橘

- 11 かほる香にとほきその世をおもひ出でむかし忍ぶの軒の立花
12 軒ちかく花橘の咲しよりかほる香あかぬ夕風ぞ吹」2才

寄衣恋

- 13 おもひ侘夜の衣をかへしてもつれなき人は夢にだにみぬ④

〔合点有り、二句「夜の衣は」、末尾に「□く調候」と書入〕

- 14 さめて又したふもはかな小夜衣かへしてみつる夢のなごりを④

〔四句「かへし見つる□」〕

初秋（①、⑤）では「早秋」

- 15 けふよりは秋きにけりと吹風も身にしみそむる朝戸出の袖

- 16 ちりそむる一葉の上にけさよりは秋としらせて置く白露①241、⑤

- 17 露軒ちかきずがる萩の上葉にけさよりはまづ吹そむる秋の初風①242、⑤」2ウ

田家

- 18 賤が住田づらの里のそことしは朝夕たつるけぶりにぞしる④

〔合点有り、初二句「賤がかすかなるむ田づらの里地の」〕

- 19 秋穂たれ稲葉色づく此比は田づらの民の家居にぎほふ④

寄原恋（20）しらでかく契りし中の／浅ち原心の秋に色かはるとは

- 21 人心あさちが原のあさしとはしらで年月したふはかなさ

- 22 ちぎりてし人の心はあさぢ原たのむとすれど色かはり行④
- 23 つれもなくかはるはうしや人心あさぢが原のあさき契りは
- 24 日にそひてうらみぞまさるまぐず原身をあき風の吹そめしより④
〔谷点有り、四句「身にあき風の」〕 3才
- 25 我身世にながらの橋のながらへてつれなき人をしたふはかなさ① 255
うしや 恋わたる身は
- 26 我中は久米ぢの橋のはかなくもかけし契りのたへぬるぞうき① 256
- 27 難波江やたぐひも波の末遠くかすみに、ほふはるの曙① 236
- 28 いつはあれどわきてたぐひも波の上あげほのかすむ住の江のはる① 235 3ウ
- 29 咲しより花に心を染はて、あかずぞめづる春の此比
見花
- 30 あかずみる心を花のしるならば日数ふるともちらずもあらなん
落花
- 31 立ならぶ花の梢を吹風に空さむからぬ雪ぞふりくる
- 32 咲花のちるとはかねてしりながらさそふはつらし春の山風 4才
冬月
- 33 立ならぶ木々の梢は落葉して霜夜の月のかげぞくまなき① 248

34 秋よりも光をそへて池水の氷のひまにやどす月かげ①247

寄草恋

35 草の名のしのぶとすれどいつよりか世にはうき名初しのもれ涙はじめけん

36 我中にたがたねまきし忘草いつよりかくはしげりあひぬる④

〔合点有り、二句以下「たがたねまきしわすれ草のいつよりかくはしげりぞめ□□□□」〕

37 つれなしや契り置しも月草のうつろひやすき人の心は④「4ウ

鷹狩

38 狩人の袖さむからんはしたかの外山のあらし落るすそ野は④

〔合点有り、二句「袖さむからん」、「すそ」の右に紺の不審紙有り〕

39 霜ふかき小野、しの原ふみしだき鳥立尋るけふのかり人

40 御かり野に今朝置霜をふみしだき心いさみていづるたか人④

〔初句「御かり野の」、二句「今朝の朝霜」〕

寄海恋

41 うしつらし人の心はあら海の蟹のかるてふみるめさへなき④

〔「つらし」の右に「又句絶也」と傍記、結句の左に「句絶ニナル也」と傍記〕

42 いかにせんたのみし人はわたつ海の塩の満干にかはる心よ④

〔合点有り、初二句「いかにせんたのまみし人は」〕

43 つれもなき人にうらみは有磯海の岩うつ波に身をくだきても「5オ

寄鳥恋

44 たのめてもこぬ夜半の床のひとりねに我身うづらの音をのみぞなく①
うき人はとひこぬ夜半のひとりねに我身うづらの音をのみぞなく①
たのみてし人はこぬ夜の① 257

45 みるになほ我ひとりねをうらむぞよつがひはなれぬ池のをし鳥① 258

歳暮

46 さまぐのことわざしげき身には猶いとゞ程なき年の暮がた④

47 おしみてもとまらぬ年の早瀬川よどむ間もなくながれてぞゆく④

〔初句「おしみても」、末尾に「□く調候」と書入〕 5ウ

鵜川

48 夏の夜の更ゆくまゝに大井河瀬々にかずそふかゞり火

49 う飼舟月の入さを待えつゝ、河もの波にかゞりさす也

野月

50 置露にもすそぬるとも分ゆかん月かけ清き武蔵野、はらゝ⑤

51 きてみよと人まつ虫の音にぞ鳴花野の露にやどる月かけゝ⑤」 6才

女郎花

52 秋の野に心さだめぬ女郎花風てふ風になびく姿は

53 心あらばあだになびくな女郎花秋の野風はよしそふともゝ⑤

54 さだまらぬ心とぞみる女郎花かなたこなたになびく姿はゝ⑤

待郭公

- 55 かくばかり待ともしらで時鳥をのが初音をなどおしむらん
56 待侘る心をしらは時鳥一声ををしまでもらす山一声時鳥もがな
57 時鳥わがまつ空はつれなくて雲のいづこに声もらすらん」6ウ

聞郭公

- 58 わがれためにきもらす初音やの一声はさだかにぞきく山時鳥
59 ねやの戸をおし明がたの時鳥もらす初音をうれしとぞ聞

江月

- 60 うづら鳴真野、入江の波の上にやどれる月の影ぞ淋しき、⑤
61 難波江や芦分小舟さやかなる月にうかれて漕やいづらん
62 さやかなる月にうかれてみたと江のたな、し小舟漕やいづらん、⑤」7才

寄山恋

- 63 妹と背の山てふ名さへ聞もうしつれなき人を恋る我身は
64 人しれしれ忍ぶの山なの人のめをふかくしのふ山しのびくてかよふ心を
65 しられじな人めもふかくしのぶ山しのびてかよふ中のむつごと④
〔谷点有り、二句「人めをふかく」、結句「中のむつ□□□□」末尾に「□□候」と書入〕
66 山にさへ妹と背の名のあるとしはしらでや人のわれにつれなき④

浅雪

67 起いで、みるもめづらし此朝けたゞ一重なる庭の白ゆき④

〔合点有り、末尾に「よく調候」と書入〕（なお、①101には「降てしもつもりはやらす此朝けたゞ一えなる庭の白ゆき」という、言葉が多く重なる歌がある。）

68 かれのこるあさぢが上に降雪はきのふの霜の倂にして④ 7ウ

擣衣（69） 烏羽玉の夜はすがらに賤のめが／麻のさ衣打もたゆまず

70 長き夜に賤のをだまきくり返しおやむ間もなく衣打声

71 すが原や伏見の里はあれはて、秋風寒みきぬた打声

72 秋風のたよりにぞきく里遠みあまもまどをの衣うつとは

叢螢

73 秋ちかき野べの草むら露深み夜はほたるのやどりにやする

74 露すがる草むらごとにくる、より飛やほたるのかげの涼しさ

（なお、①106には「更る夜は置露しげき草むらにすがるほたるのかげぞ涼しき」という、言葉が多く重なる歌がある。） 8才

落葉

75 色ふかく染し紅葉の此ころはさそふあらしにまかせてぞちる④

〔合点有り〕

76 山姫のふかく染てし紅葉々をつれなくさそふ嶺の木枯④

千鳥

77 いづくにや妻を沖津のはまちどり波のよるく

ひとり夜寒を侘て鳴らん

78 月かげもいたくふけるの浦かぜにしば鳴千鳥声ぞすみ行
79 夜を寒み妻こひかねて

80 すみ渡る月に妻とふ小夜千鳥をのが浦く鳴わたるらん

81 へよる波に立居さだめぬ／うら千鳥又いづくにか／鳴わたるらん」 8ウ

夕虫

82 侘てすむ草の庵の夕間暮淋しさそふる虫の声くゝ ⑤

83 黄昏は庭もまがきもおしなべてさまぐ虫の鳴しきる声 ⑤

岡紅葉

84 岡の名の八しほにはあらで秋ふかく千入に染し木々の紅葉々

85 夕日影さすや岡べにいく千入そめて色こき秋の紅葉」 9オ

岸柳

86 春風に糸よりかけて行水の波のあやをる岸の青柳① 237

87 川岸の春の青柳打なびきみどりをあらふ水のしら波

88 水^液のあやををりそへけりな行水のみどりをあらふ岸の青柳① 238

秋夕

89 黄昏のうさはまぎれず我のみの秋にはあらぬとおもふ物から ⑤

90 夕ぐれは千々のおもひの数そひて秋の哀ぞげにたぐひなき ⑤」 9ウ

寄木恋

91 我にうき人は常盤の松なれや千とせふるとも色はかはらじ④

〔合点有り、下句「ちとせふるとも色はかはらじ」
〔しはせふるとも色はかはらじ〕

92 葉がへせぬ軒ばの松はつれもなき人の心のたぐひとぞみる④

〔初句「色かへぬ」

若葉

93 春の日の光りにもゆる初若ないざおり立て我もつまゝし

94 もへいづる野べの七草若なを賤のめが袖ふりはへてつみはやすらし⑩オ

残雪

95 咲花のおもかげみせて梢にはまだきへのこる去年の白ゆき

96 春風よあだにちらすな咲花のおもかげみする去年故のの白ゆき

97 はるきぬとかすむやいづこ白雪はまだきへあへぬ遠のこるみよし野、山の山端

朝霞へ98 いとはやも今朝はかすみの立こめて／のどかにむかふ春の山はへ

99 朝日かげ出かけ出る外山のみねたかみ霞の衣立わたりぬる

100 春の色をまづみせそめて此朝けかすみに、ほふ遠の山端

101 朝がすみ色ものどかに立こめて⑩ウ

夕立

102 時の間にはげしくきほふ夕立はふるもはるゝも風のまに／、⑤

103 ふりくるも晴るも風の心にてともにあしとき夕立の雨、⑤

104 此里にふるかとみれば又晴てあしもやすめぬ夕立の雲

池藤

105 むらさきの色をふかめて咲藤の花のかけみる春の池水

106 むらさきの色こき藤の花のかけうつるもあかぬ庭の池水

107 咲藤の花のかけみる池水は波の面は水にも春の色ぞうかべる」11才

神楽

108 庭火たき霜の白ゆふかけまくも神の御前にうたふ榊葉④

〔合点有り、初句「庭火たき」、末尾に「可然候」と書入〕

109 榊葉に置そふ霜の白にぎてとりくうたふ朝倉の声④

〔末尾に「是も」と書入〕

河月〈110 所更行がらいとゞ光りも清滝の／川瀬の波をてらす月かけ、⑤〉

111 山河やさやかにてらす月かけにすむいろくずの数もみえけり

更所行がらばいとゞ光りも清滝の名にながれたる月秋の月かけ哉、⑤

113 河の波よるともみえずさやけさは月のかつらの名にしおふかけ」11才

夏草

114 かりはらふ跡よりしげる夏草に野べはさぞなとおもひやらるゝ、

115 あげまきのかるともみえず野べは今道もなきまでしげる夏草① 239

116 若なつみわらび折つゝこし野べのいまおもはかけもなくしげる夏草① 240

早苗

117 賤のめがくるともしらずしらの鳥羽田の面にさなへとる也

118 夕日かげさすや田面にうへのこすさなへつかねてかへるますら男

119 乙女子が広き田面にわせおくてひとつみどりにうへわたす也

(なお、①187には「乙女子は広き田面におり立てみどりの早苗とれどつきせぬ」という、言葉が多く重なる歌がある。)」12才

谷鶯

120 谷ふかみまだしらゆきのふるすにも春をしらせて鶯ぞなく①233

(なお、①93には「雪もまだきえあへぬ谷のふるすにもはるきにけりと鶯ぞなく」という、言葉が多く重なる歌がある。)」

121 春さてもみ谷がくれはしら雪のふるすながらに鶯のなく①234

(なお、①94には「はるきぬと誰か告げん谷ふかみふるすながらに鶯のなく」という、言葉が多く重なる歌がある。)」

梅風

122 うつし植し外面の梅の咲しよりはふもあかぬ春風ぞ吹

123 朝な夕な鉤簾の垂簾のひまとめて梅が、送る軒の春風」12ウ

暮春

124 さくら花ふかくちりしけけふのみと暮ゆく春の道たどるまで

125 ゆくはるにをくれやせじと花は根に鳥は古巢に立かへるらん

九月尽

126 しかすがに暮ゆく秋はおしきかなうき時なりといひし物から

127 色もこく染し紅葉のにしききて秋やいづこに立かへるらん」13オ

浦月

128 さやかなる影にうかれてすまの浦の蟹やもしほを月にくむらん

129 さはるべき山のはもなし和田津海の波の上ち はるかに遠くてらす月かけ

七夕

130 暮まちて舟出しつらん漢川年に稀なる星の逢よは、⑤

131 まどをなる逢せながらも秋毎にかはらぬちぎり星やなぐさむ、⑤」13ウ

述懐

132 年月をいたづらにのみ

あだにくらしていまさらに身のおこたりをなげくく や むおろかさ① 262

133 くやみてもはかなかりける年月をあだに過こし身のをこたりを① 261

134 いかにせんあだに月日をくらしつ、悔の八ち度先だ、ぬみは

寄月恋

135 よるもなほ人めをつ、むわが袖に涙あらはす月ぞつれなき④

〔結句〕「月ぞつれなき」

136 月影のやどるもうしやおもひあまりつ、むにあまる袖の涙にを

137 月影のやどるもうしやよなく、に物おもふ袖の涙とひきて④

〔末尾に「二首とも調候」と書入〕14オ

寄風恋

138 ちたのみこしぎりてし人の心に秋風のいつよりなどで吹はじめけん①254

139 かならずとちぎり置てし夕昏はまつ吹風もそれかとぞ聞①253

寄雲恋

140 逢事はいつともしらずしらす雲のよそにのみゝてこふる身ぞうき④

〔二句「いつともしらす」で、四句「よそにのみ見て」、結句の右に「あたり候」と傍記〕

141 大空にたゞよふ雲のそれよりもはれぬはむねのおもひなりけり④

〔合点有り、上句「大空立おほにたゞよふ雲まじりの雲ののそれ□□□□」として更に「タゞヨフ□□□□所もある也」と右に傍記〕 14ウ

夜鹿

142 外山なる正木のかつらながき夜にくり返しつゝ鹿の鳴声、⑤

143 月影も更行夜半にをのが妻こぬを侘てや鹿の鳴らん、⑤

水鳥

144 池水もをのが羽風にこほらん朝置霜をはらふをしかも

145 かれのこるあし間の水もこほる夜はうきね侘やてや池のをし鴨

146 池水もなほこほらんをしかもの霜うちはらふをのが羽風に」 15オ

時雨

147 吹風山の心にかかす村時雨ふるかとみればやがてはれぬる④

〔合点有り、初句「吹風山の」の「吹」に「山」の別案なし。末尾に「□□よ調候」と書入〕

148 やがて又此方の里やしぐるらん外山のみねの風にかゝる村雲の浮

149 ふるもとき晴るもやすき村時雨浮雲さそふ風のまににまかして④

〔二句「降もとまき」〕

羈旅

150 行暮て今宵此野に草を床露をまくらのうきねをやせん

151 旅衣かひまゐ露けき袖をかたしきてうきねのまくらの床は夢もむすばず① 15ウ

夏祓 〈152 御祓する袂すゞしく吹風は／まだきに秋の立かとぞおもふ、⑤〉

153 神風やみもすそ川の清きせにけふもろ人の御祓すらしも、⑤

154 けふといへば麻のぬさもてこゝだくのつみてふつみを祓すてまし

155 夏川や早瀬の波に御祓してつみてふつみはあらじとぞおもふ

春月

156 打かすむ外山のみねをいづるよりかけおほるなるはるのよの月

157 ならひとはおもふ物からいづるよりかすむはつらき春の夜の月① 16オ

神祇

158 あふげなほ此日本に跡たれて君が代守る神の恵を① 264

159 さまぐに跡をたれつゝ君が代のさかへを守る八百万神① 263

祝言

160 数ならぬ我身にさへもあふぐぞよたへぬ八雲の道のさかへを

- 161 雨風も時をたがへぬ恵にやなべてうるほふ四方の国民① 265
- 162 わが君がめぐみにもれず民やすく世はゆたかなる時や此とき① 266「16ウ
- 山月
- 163 山の名のあらしにはれて雲霧はあとなきみねに出る月かげ⑤
- 164 さはるべき雲はあらしにはれて今山のはいづる月のくまなき⑤① 243
- 165 秋風に雲はあとなく晴ていまさやかに出る山のはの月
- 166 吹風に雲きり晴てさしいづるかげもさやけき山端月① 244
- 積雪
- 167 ふみ分て誰もとひこぬ庭の面はつもるまゝなる今朝のしらゆき④
〔合点有り、「ふみ分てたれもとひこぬ庭の面はつもるまゝなる今朝のしらゆき」の
 一〕
- 168 日をへつゝふりつむ雪のふかきには老ぬる駒も道やまどはん④
- 169 なびきふす竹の末葉のみへぬまでふかくつもれる今朝の白ゆき」17才
- 朝霜
- 170 秋にみし花の千種は冬枯し庭のまがきにむすぶ朝霜④
- 171 ちりつもる木の葉の上に此朝け置霜こほる色の寒けさ④
〔合点有り、末尾に「可也」然候」と書入〕
- 眺望
- 172 ちりうかぶさゝの一葉とみるがうちにゆくゑは波にきゆるつり舟① 259

173 舟つなぐとむみなどよりまづ暮そめて波ちはるかに残る日のかげ①260」17ウ

五月雨

174 さなへとりぬれにし賤が衣手をほすひまもなき五月雨の比

175 まこも草かる賤や侘らん池水のみかさまされる五月雨のころ

176 池に生るこままこももあやめもみえぬまで水かさまされる五月雨のころ

帰雁

177 百千鳥さえづるはるにをのれのみひとりわかれて帰る雁がね

178

いつはりのある世なになどなりとかか春しれとやくればためしかはらず立帰るかへるかりがね」18オ

卯花

179 書まなぶ賤とやはみん窓ちかくあつむる雪にまがふ卯花

180 わふりつすれては雪しかぞもおもふ白たへに卯花さける庭のまがきは

181 あつめ置ゆきとみゆらん窓ちかく枝もたはゝに咲る卯花

初花

182 はる雨のめぐみ待えて此朝けほころびそむる枝の初花

183 あすよりはなほ咲そはんけふはまづひもときそむる枝の初花」18ウ

花盛

184 立さらぬ雲かとみぞへてよし野山みねのさくらの花の盛りは

185 よし野山雲も霞も匂ふ也なべてきくらの花の盛りなる比

186 よそめには雲

187 雲とのみあやまたれけり吉野山みねのさくらの花の盛りは

寄燈恋

188 ともし火のかげしらむまでこぬ人を待はくるしき物にぞ有ける

189 うき人はとひこぬ夜半の淋しさにかゝけてむかふねやのともし火

190 うらなくも書つらねたる玉章をみるになぐさむともし火の本④

191 うき人は待にとひこでふくる夜は淋しくむかふねやのともし火④

〔合点有り、四句「淋しくむかふ^{もつひし}」〕 19才

寄獣恋

192 あら熊のたけきにならふ人心いつ我かたになる、をやみん④

〔合点有り、一首「あら熊のたけきにならふ人ご、ろいつわが方^{こはいつわが方}になる、をや^{みん}□ん」〕

193 わが方のちざりわすれて今は又たれとふするの床になれけん④

款冬

194 きしかげに八重山吹の咲しよりはるの色にや井手の玉川

195 きしちかく棹さしよせて山吹の花の下ゆくはるの河舟

196 匂へなほあかずめでこし梅さくらちりにし後の山吹の花」 19才

夏月

197 ほどもなくあくるぞおしきいづるより涼しさあかぬ夏夜月
198 山端をさしいづるよりはしるして涼しくむかふ夏のよの月

寄露恋

199 待ゆふべわかるゝあしたわが袖は涙の露のかはく間ぞなき①251
200 むすび置露のちぎりもいつしかとちりてはかなき中となりなき
201 もろくちる露の契りの言の葉をゆく末かけて何たのみけん①252「20才

寄雨恋

202 更ゆけばはれやしましふるとてもかごとになすなよひの村雨④
203 宵の雨雨のをかごといになして更ひてしもつれなき人なのとはぬ夜ぞうき④

〔合点有り、一首「よひの間を雨をかごと」□□□□ふけても人のとはぬつ□□□□、末尾に「よく候」と書入〕

寄関恋

204 逢坂は名のみなりけりうき中はかたき戸ぢめの恋の関守
205 ひたすらにしたふもはかなうき中はいつ逢事もしら川のせき」20ウ

簷梅

206 軒ちかく咲そめしより朝な夕なにほひを送る梅の下風
207 わが袖にふかくうつせとはるかぜのひまなくさそふ軒の梅が、

氷初結

208 さえし夜のあらしもしるく此朝け池のみぎはは氷そめぬる

209 谷河の岩間をせばみ行なやむ水より先やこほり初らん」21オ

寒草 〈210 野べはいま秋みし花の跡もなし／のこる草葉も霜にしほれて④〉

〔合点有り、四句「のこる草葉は」〕

211 かれのこる草葉も霜にうづもれて秋みし野べのおもかげもなし

212 ゆき間よりもへ出るはるのおもかげをまづ今朝みする霜の下草④

213 寒けしな秋みし野べの色もなしのこる草葉は霜にしほれて

野霰

214 あられふる音ぞはげしき朝毎に置霜こほる野べのさゝ原①250

〔なお、①20には「寒けしな音もはげしき山風にあられ玉まく野べのさゝ原」という、言葉が多く重なる歌がある。〕

215 吹すさぶ野べのあらしに小笹原あられくだくる音のはげしさ①249」21ウ

寄枕恋

216 つれなさをかこつ涙をかたしきのねやのまくらはかかく間ぞなき④

〔結句「かかく夜□□□□」〕

217 うき人 ^{の(は)とは}は ^いと ^はぬ ^いつ ^から ^いさ ^かにつ ^かも ^りこ ^しま ^くら ^のち ^りを ^いつ ^かは ^らさん④

〔合点有り、上句「うき人とは ^{たのめても}い ^{かく}夜 ^{かく}つ ^もり ^こし ^まく ^らの ^ちり ^を ^いつ ^かは ^らさん」〕

218 敷妙の枕につゐに朽やせん涙か、らぬ夜半しなければ

窓竹

219 うつし植てなほき姿をわが友と朝夕むかふ窓の呉竹①130④

〔合点有り〕

220 呉竹のなほき姿をならふやとうへてぞむかふ窓の明くれ①129④」22才

寄糸恋

221 人めにもしらるゝほどにかふち女の手ぞめのいとの色にいでけん④

222 打とけてぬる夜はいつと白いとのしられぬ中に過す年月④

〔合点有り〕

223 かはるてふことはしらじな白いとのむすびそめつる中の契りは

224 夏引の手引のいとふとも立名のうさは取もかへさじ

225 打とけてぬる夜はいつとしらいとのしらで年月したふはかなさ

山家嵐

226 まれにだに人はとひこぬ山里は松のあらしを友とこそすれ④

〔二句「人しとひこぬ」(なお、①12および②には「くる人もまれなる柴の庵には松のあらしを友とこそきけ」という、言葉が多く重なる歌がある。)

227 まつに吹嵐の音のはげしさも友とぞなるゝ山かげの庵④

〔合点有り、結句「山の下庵」

228 山深みひとり住身の友とてはまつのあらしにむら鳥の声」22ウ

海路

229 沖つ風吹にまかせて漕ゆくもよそめあやうき蟹の釣舟

- 230 蛩のやくもしほのけぶり打なびき浦のとまやのよそめ淋しき
- 231 朝なぎにうら波遠く漕いで、沖にたゞよふあまのつり舟
萩露
- 232 秋はぎの花の盛りは置そふる露も色ある宮城野、はら
- 233 置露になほ色一人のそひてさかりえならぬ秋はぎの花」23才
萩風
- 234 軒端生しげるなる萩の上葉にやどりしてたえず音する夜半の秋風
- 235 朝な夕な萩の上葉に置露をつれなく軒ばにさすやくそふ庭の秋風
浦松
- 236 ちりうせず正木のかつらながき世に名も高砂の浦の松がえ④
- 237 ちりうせぬかげをためしに言の葉の道さかへゆく和哥のうら松④
〔谷点有り、四句「みちさかえゆ□□」〕23ウ
春雨
- 238 はる雨の日をふるま、にもへ出し野べの草ばの色ぞ、ひゆく
- 239 もへ出し野べの若くさ此ころはみどり色そふはる雨のぞふる此
- 待花 240 待としも花はしらずや
- 241 此比は咲べき時と待になほつれなくとけぬ花の下紐
- 242 待としもしらでつれなく日へへてもなほとけやらぬ花の下紐
なとあやにくに花のまだしき

243 待侘る心もしらで日をへてもなど咲花の枝にまだしき

244 まつになほいとゞまだしき山ざくら花の下紐いつかとくらん」24オ

郭公稀

245 夢さめて聞もめづらし小夜更て山ほと、ぎすまれの一声

246 たまさかの一声だにも小夜ふかく夜にしのび音てもらすになく山ほと、ぎす

杜蟬

247 鳴せみの涙の露にかた岡のもりの木の葉や色かはるらん

248 大あらしの杜の木がくれ置露に鳴より蟬の声の涼しさ

249 なくせみの声のしぐれに涼しさも秋のけしきの杜の下かけ

250 秋ちかきもりの木の葉もなくせみのこゑのしぐれにうつるひぬらん」24ウ

初雁

251 霧ふかき外山のみねを飛こゑて都の空に雁は来にけり

252 名にしおふ都の月をみるとか雲路はるかに渡る雁がね

籬菊

253 千世千々もなほの秋ふりせぬ色をみぎりなるまがきに咲る白ぎくの花

254 霜の後もなほうつろはでませの内にさかり(マ)盛しき花の白ぎく」25オ

庭紅葉

256 此比の野山はさぞな庭もせの木キの梢は染ものこらず
255 (染まさば猶いかならん此朝け／まだ初入の庭の紅葉々)

257 露にそめ時雨に染て此比は色も千入の庭の紅葉々

初冬

258 けふよりはゆきげの雲と立かへて空にも秋の色はのこらず④

〔二、三句の右に「雲の色のかはらん事いかゞ」と傍記〕

259 此朝け雲の衣も色かへて冬来にけりと時雨ふる也④

〔合点有り、三句「色□□□」〕25ウ

叔父なる人身まかり給ひしいみの中に送り給ふ

260 いく度か袖ぬらすらん村しぐれさだめなきよとおもひなしても 信美

いみにこもり給ひしを、けふなんとぶらひ侍らんとおもひしが、さはる事のありてとひまいらせぬ口おし

さによみて参らす

261 藤ごろもなみだゆ^にくちし袖のうへはみぬも中くかなしかり梟 信美

墨ぞめの袂は野べの草のごとなみだの露のかはく間^もぢ 経亮 26オ

石州の御もとは山ちかく住たまへば楓樹など紅葉せしに、時雨のうちそ、ぎて木の葉のもろくちるをみ給

はゞ、いとゞ哀もまし侍らんとおもひやりて

263 形見とやいまはながめん神な月時雨にそめて落る紅葉を 経亮 26ウ

〈キーワード〉

非蔵人 新日吉 藤島宗韶 小沢蘆庵 羽倉信美 橋本経亮 詠草

(了)